

私見創見 Thursday

青森の自然にはどのような価値があるのか。広辞苑第5版によると、「自然」とは「山川・草木・海など、人類がそこで生まれ生活してきた場。特に、人が自分たちの生活の

便宜から改造の手を加えていないもの」とある。世界には熱帯、亜熱帯、温帯、亜寒帯、寒帯などさまざまな気候と生態系が存在する。コケ植物は255種、鳥類87

本では温帯の中には実は温かい方の温帯を示す暖温帯、涼しい方の温帯を示す冷温帯という用語がある。暖温帯は常緑照葉樹林が成立し、ミカンなどの柑橘類が生産可能な範囲と重なる。一方、冷温帯には落葉広葉樹林が成立し、リンゴの生産の可能な範囲と重なる。その落葉広葉樹林の代表的な樹種がブナである。県内のおもなブナ林は白神山、八甲田山麓、奥入瀬溪流、下北半島、津軽半島に広がっている。特に白神山は1993年に世界遺産に登録され、人為的な影響をほとんど受けていない原生的なブナ天然林が東アジア最大級の規模であることが評価された。環境省自然保護局により公表された「白神山自然環境保全地域総合調査報告書」によると、青森県側の種子植物、シタ植物の種数は542種、コケ植物は255種、鳥類87

青森の自然

新たな価値の創出

種、哺乳類14種、昆虫類約300種など、白神のブナ天然林には多様な動植物が生育、生息していることが明らかになっている。すなわち生物多様性が高く、その特性から公益的機能

といわれる水源涵養、地表浸食防止などの機能も高い。林内から流れる水は、海洋へ豊富な栄養塩類を供給し、プランクトンの栄養となる。青森のブナ林は「東アジアの原生的な天然林」という意味で

鮎川恵里

八戸工業大
生命環境科学科准教授



あゆかわ・えり
1973年東京生まれ。総合研究大学院大学博士課程修了。2004年から八戸工業大で勤務。植物生態学や海岸植生が主なテーマ。青森県環境審議会委員などを務める。00～01年の第42次南極観測隊に参加した。

値があり、水源涵養や浸食防止、漁場の涵養という価値を持つ。近年では、観光資源としての価値も見いだされている。

例えば奥入瀬溪流では、NPO法人奥入瀬自然観光資源研究会(河井大輔理事長)と連携し、川沿いの溪畔林の生態系の観光資源としての価値の発掘が行われてきた。著書も

コケ植物の調査やガイド向けコケ研修会や日本蘚苔類学会の「日本の貴重なコケの森」の認定に貢献した。

さまざまな方面での努力の結果、「コケの森奥入瀬溪流」としての知名度は上がり、今ではおおいけん「コケさんぽ」のエコツアーや奥入瀬溪流ホ

テルの苔カールステイなど、観光商品として定着している。10年前にはほんの数人しか目をつけていなかったコケに対し、ネイチャーガイド、研究者、行政の産学官の連携で新たな価値が創出されたともいえる。

そのほかにも県内には、さまざまな渡り鳥が春、秋の渡りの休息地としている六ヶ所湖沼群、オオセツカの生息する弘沼、日本一の面積の砂丘である猿ヶ森砂丘(防衛省下北試験場内のため一般の立ち入りは不可)、本州としてはおそろく最も低標高であろうミスコケ湿原を有する屏風山湿原池沼群、希少な植物が数多く生育する種差海岸など、自然愛好家や研究者にはソクゾクするような自然が存在する。

しかも、研究のための許可が必要な猿ヶ森砂丘以外はいずれも車で比較的簡単にアクセスでき、人の暮らしと貴重な自然が近い距離にあるというのも一つの魅力である。冒頭の「自然」の定義にあったように、人が自分たちの生活の便宜から改造の手を加えていない山川・草木・海が、都会の人にとってみればびくびくするような身近な場所に存在する。

青森の自然には、森や海洋からの生産物による経済的な価値以外にも、東アジアの代表的な森林を有するという生物多様性の価値、水源涵養、地表浸食防止など人の生活の基盤となる価値がある。さらに、青森の自然には観光や教育の場の提供という価値がある。

生態系を傷つけずに利用するという絶対的なルールを守った上で、ワイズユース(賢明な利用)をしながらも、まだまだ今後、その価値を高める機会はある。